

## モース (Marcel Mauss) の政治社会学論について\*

小 関 藤 一 郎\*\*

## I

1975年頃をはじめたヨーロッパを中心として世界的にひろまったデュルケームに対する関心の復活と再評価の努力は多くの成果を生み、最近の *Année Sociologique* の百年祭とともに、一応終末を見たようであるが、1994年のフルニエ (Marcel Fournier) のモース論 (約800頁) とともにモースの政治的活動をあつめた *Ecrits Politiques* の刊行 (1967) によってデュルケームへの再評価の動きはまだ終焉したものではないことが明かになった。このモースへの学界の寄与に対する再評価は1996年の *Revue européenne des sciences sociales* 誌の tome XXXIII の n° 105 をしてモース号全巻に提供させるほどになった。この機会にモースの再評価を総合的に検討することは大切なことであろうと思われるが、本稿では余白の関係から、行うことはできないので、彼の政治活動に関する *Ecrits Politiques* だけをとり出し、その特徴を明かにしたいと考える。実は、筆者も70年代にモースの供犠 (Sacrifice) を訳出したことがあるが、この訳書が最近出版社の重版再刊の試みの一として三年ぶりに復刊されることになった機会に彼の「宗教社会学」をもう一度考えて見ようと考えていたので、彼の文献を少し調べ直して見たら、*Ecrits Politiques* が余り分量も多くしかも多くの人に未知のままであることを考えモースの政治社会学を明らかにするため一文を草したいと考えたのである。ところが、*Ecrits Politiques* を入手しておどろいたことはこの書が750頁にもなる浩瀚

なものであったである。

しかも、この著作発足した時点が、1895年であることである。この時期はモースの最初の著作「供犠」を社会学年報の第二巻に刊行する2年程前であるにすぎないのである。

そしてこの政治的活動はそれ以来毎年のように続いている。政治論集を編集した M. フールニエ Marcel Fournier はこの仕事をひきうけた時、こんなに政治論が多いとは考えなかったとべている。フルニエによるとモースが政治論として未完のまま残された“nation”に関する著作と「ボルシェヴィズム」に関するものを除いて200以上の *textes* があり、その全部をこの *Ecrits* に収めることはできなかったという。また“nation”に関するものは公刊されたが、*Ecrits politiques* と見られるものの中にはどこまでが、科学的のもので、どこまでが *Politique* になるのかという区別もつけるのが困難である。つまり、**Mauss** はその全生活を現定することも至難のようで、彼の生活は学者としての面のほか、彼が若い頃から政治に深い関係をもっていたため、「市民」としての多面的な面たとえば社会主義者として、生活協同組合活動家としてのなどの面が考慮されなければならない。学界活動では伯父デュルケームとの関係もあり、「供犠」の研究に当って指導をうけたシルヴァン・レヴィのようなサンスクリット学者との交流、デュルケームのエコル・ノルマル時代からの親友政治家ジャン・ジョーレスとの接触 (社会学年報最初の刊行の頃デュルケームはまだパリ大学には移ってきておらず、そのためパリにいたモースは年報刊行の重責の一端を担ってお

\*キーワード：Marcel Mauss・民族学の創設者・人道的社会主義論・ボルシェヴィズム批判

\*\*関西学院大学名誉教授

1) Marcel Mauss, 'Le savant et le citoyen' とフルニエは *Ecrits Politiques* の序文の冒頭にかいている。

2) A. S. (1950) に発表

り、デュルケームのメッセージを伝える役割も果たさなければならなかった)。ジョーレスとの交友関係からもモースの政治とのかかわりは(特に社会主義への傾倒は)師であり、伯父であるデュルケームの態度とはかなり異っていた。すなわちモースは社会主義の政治活動に対して相当突っこんだもので、彼の伯父がドレフュース事件の際と第一次大戦の時を除いて直接政治的討論に参加したり、民衆に直接呼びかけたりすることは拒否し、政治に対しては文書を通じてしか関係をもたなかったのに対して、政治的に直接的に関与していたのである。それがたとえばフランス社会党の第一回大会の集合への出席とその時の挨拶や1900年社会主義生活協同組合の国際会議への出席、その席上での報告とか、社会主義運動の1901年2月1日号にのった「社会主義者と生活協同組合員」の将来に対する展望と政黨員の覚悟、社会主義は棄権黨員としての行動を立派に遂行する必要の自覚や、国際協調の確立には各民族単位の組織運営を基礎をかためなければならぬなどの発言<sup>5)</sup>、等市民としての立場からの発言も数多くなされているのである。今それらを一々要旨だけでもここにあげるとすると原稿用紙は何倍になるかわからないぐらいである。ただ社会主義の理論に基づく生活協同組合論は筋のとおったものが多く、マルクスの階級闘争的なあるいは煽動的な言辞は見られない。あくまでもデュルケームの主張するように、暴力的手段に訴えて社会主義に建設する方針に反対する基本的考え方は変ることなく貫かれていることが特徴である。

さて、*Ecrits Politiques* は1896年にはじまっていることはすでに述べたとおりであるが、その最初は G. de Greef の著 *L'Evolution des croyances et des doctrines politiques* についての書評 *Compte rendu* である。これは当時のマルクス主義者 Paul Lafargue たちがはじめた *Le Devenir Social* に掲載されたのである<sup>6)</sup>。

## II

モースは学問生活への出発とほとんど同時に政治(社会主義的)活動をはじめたといつてよい。その第一歩が De Greef の著作の書評である。それは上述したように1896年の *Le Devenir Social* に刊行された。その要旨は次のとおりである。ド・グレーフによれば政治は19世紀末に漸く科学となったが、それ以降コントの三状態の法則(*loi des trois états*)に従いあらゆる主観的要素は排除され、客観的要素として政治を構成し、その発展は民主的制度、真に進歩的制度の登場を可能ならしめた。ド・グレーフは社会学者の実践的役割を認めその立場から政治的現象がより特別に社会的として現れるのは政治的信念と理論においてである。前者は観念の面であるが、後者は事からの面である。両者は人間の動機と行為の表象の対応物である。政治は社会的機関、社会的機能の調整なのであるが、これらの機能は超有機体の機能であり、意識的機能なのである。すなわち、集合的意志を構成する観念と表象のシステムであり、同時に表象と熟慮と選択のシステムとして個人の意志を構成する。政治組織は集合的力ではなく、集合的意志である。政治はまさしくこうした集合意志の形態の研究を目的とする。このあたりド・グレーフの考え方は若干流動的である<sup>7)</sup>。というのは集合的意志は表象と熟慮の体系として定義し、執行権力である機関はより重要なものとされて無視されると、集合意志と政治的信念と理論を区別する明確な線をひくことは困難になる。ド・グレーフによると政治的信念と理論は意識をもった集合的状态でその相対的に安定した定着と調整は大部分社会の有意的活動を決定する。すなわち社会の日常行動と政府を決定する。その区別は全く色調の差となり、政治的理論と信念は政治形態と関係づけられる社会的思考となり、それはまた多かれ少なかれ理想的な社会をとりかこむ雰囲気と

3) Marcel Fournier P. 600 *Ecrits Politiques* P. 87-90

4) *ibid.*, P. 114

5) *ibid.*, P. 101

6) なおこの *Le Devenir Social* は理論的なものであることを目標とし一般大衆に Marx の理論を普及することを目的としたものに *Le Mortement Socialiste* がある

7) *ibid.*, P. 64

なり、そこに浸っている制度は其中で形成されくずれたりする。理論は反省的になった信念で、本能的で、感情の圧縮に対して中立的である。それは信念に関しては感情的で、本能的基礎をなし理論や集合的意志に関しては知的なのである。それらを研究することは政治の源泉を研究することであり、それは著者の表現によると人類の政治史の魂を研究することになる<sup>8)</sup>。なぜなら、社会学は民族心理学だけでなく、集合心理学でもあるのだから。それは更に一般社会学の一部門であり、それこそ真の政治的でありかつ歴史的である一般社会学の講義にほかならないのである。なぜなら政治ととくにその心理的基礎はド・グレーフが立体的に分類した社会的諸現象と関係をもつからなのである。結局これらの研究はその具体的方法、とその目的の抽象的特性から抽象的社会学と政治の現実化計画との間の自然の推移段階を形成する。このようにして著者ド・グレーフはこの著作を彼の一般社会学の著作と「憲法制定議会と代議政体」*La Constituante et le régime représentatif* において表明された独自の政治理論だったのである。

ここで著者はこの著作の第二部として理論的であり、実践的な部分に移行していく。それは社会的決定論であると同時に現在問題になっている民主体制の未来の姿になる。実をいえば、この両者の関係は著者の考え方を十分知らない者には一寸なじみにくい点なのである<sup>9)</sup>。しかし、民主主義はあらゆる政府の絶対者が廃止されなければ勝利を得ることはできない<sup>10)</sup>。この絶対者の排除、除去こそは実証主義の仕事、社会学の仕事にほかならず、それこそ著者の理想とする社会主義、自由主義、伝統主義の融合にほかならないのである<sup>11)</sup>。

ド・グレーフによると、この仕事にとって最適なのは彼が行っている研究なのである。われわれは今この実証主義に到達するため諸々の理論が必然的に継起してきたかを明かにしたところなのである。政治的信念についても同じことがいえる。

つまり集合的思惟がその間必然的な発展を経てきたのである。そしていたるところにおいて政治と道徳、科学、経済（社会）との諸関係は抽象的社会学の原理が予見させたように検証されてきたのである。そして社会諸現象の相互依存関係、経済的要因の優越が明かにされたのである。さらに、ド・グレーフはそれから以降に発展せしめているというより枚挙した現象や人間社会の傾向は「あらゆる未開構造の根本的統一性と同質性」、それらを条件づける単純な要因の数が少いことからの帰結として軍事的または宗教的な形態の政治的調整の必然的増加、（それは社会的人口増と戦争による淘汰によって生じている。）最後に純然たる行政的権力の内部における利益代表機関の起源になる主権者の委任機関の創造優越的な社会組織の確立に好都合な一部の共同体の形態の永続性、等々の様々な命題が提起されている。

こうした問題の重要性を考えるとド・グレーフがこれらの諸問題に対し不完全な証拠しかあげてこなかったのは残念である。さらに著作の残りは三つの社会の政治的信念の研究にあてられている。それは三つの社会というより三つの文明といった方がよいかも知れないが、その三つはペルー、メキシコおよびエジプトである。そして著者はその理論をギリシアから今日までの発展とともに跡づけているのである。彼はそれらを実際に未開社会において研究されなかったのでそこで研究しているが、混同がおこっており、特に経験的事実と宗教的観の混同は著しい。しかしこの混同はより高度の社会になるとその程度はより少なくなってくる。しかし実をいうと問題は政治的信念に関してであって、合理的な理論関連的なものは余りないが、現象は十分にわけて考察できるほど区別されている。この部分においてド・グレーフはこの三つの社会の各々について歴史を別々に描こうとしたのである。すなわちペルーのまったく共産主義的な形、メキシコにおける政権委任の発展、エジプトにおける宗教的権力と対立する政治権力の間の闘争の歴史が描かれ、特に近代史との

8) *ibid.*, P. 65

9) *ibid.*, P. 66

10) *idem.*

11) *idem.*

関連をもつと詳しく描き出したかったようである。

この著作は当時の社会主義の歴史的起源づけや変遷史として一流のものではなかった。むしろモース好みの未開社会への傾斜が大きくひびいている。その点ではこの文献の選択の適正性も問題となろうし、同時代にデュルケムなどの行った著作に比しても意義は少いといえよう。

ただモースが行った文献研究で社会主義と何らかの関係をもつものはこれだけであった。しかしモースは多くの人々から「モースは何でも知っている」といわれた伝えられているが、彼の関心の枠が広大でありそれに伴って内容についての知識も大きかったであろうが、われわれはむしろモースは何に対しても大きな知識欲をもっていたことに注目しなければならないと考える。しかも関心は書物の上だけではなく、近隣諸国の生協運動の状況等々についてもいえるのであった。だから19世紀の末期からのモースの自由、自在の行動の跡を見ることによっても明かになる彼の活動を理解するには“*Savant et citoyen*”(学者と市民)だけではなくフルニエの著作の19頁の小見出しにでてくる *intellectuel et militant* (知識人と自主的活動家)もまた該当する。あるいは同じ *Fournier* がのべているように<sup>12)</sup>自由と平等のほかにも *Fraternité, Fraternité humaine* が活動地平線を示すのがより適当であろう。それにしても‘*Sacrifice*’や *Magie* を本職としてとりあげて、社会学年報を賑わせた同一人物が、消費組合活動、社会主義者の実践義務を自ら示し、他の人々にその遵守を勧めるようよびかけたり、しかもそのためオランダ、デンマーク等にまで足を伸ばしていることは驚異であるといえよう。しかしそれは逆にいえば社会主義思想——それはヨーロッパで最も支持を得たものではないとしても、その民衆への浸透のためもっと文筆面で活動すべきではなかったかともいえるかもしれない。

そのためにもわれわれは次の「社会主義的行動 *L'Action socialiste*」と題するモースが1899年3

月15日パリの集産主義者学生の集会で行った講演を見ることとしよう<sup>14)</sup>。

「会合の席上よく行動すべきだ。何よりも前進だ」という声がある。この種の発言はフランスの社会主義では多すぎるくらいだ。人びとはその叫び声をくりかえして行動していると思っている。しかし大部分の場合社会主義者として何をなすべきか、真の完全な社会主義活動とは何かはわからずにいる。そこで今まで沢山の意味をもってきたこの定句をどう理解すべきかを明かにすべきことが必要なのである。何人も行動の必要性に疑念はもっていない。とりわけ最近の出来事がプロレタリアートを重要な問題と歴史的に重大な責任に直面させられたフランスの社会主義の場合そうである。われわれは誰も論議すれば十分とは考えていない<sup>15)</sup>。弁証法的理論、無政府主義者の語る個人的思想の衝突はわれわれにとって十分な教育手段ではない。どんな社会主義者も意識をもっていれば実践の手段として反抗とか暴動ということを口にしない。何人も社会主義者の行動とは全くの受身からも盲目的反抗からも等しく距離をおいていることをよく知っている。またそれは学校の空虚な論争とも盲目的な反抗とは異なるものであること、それは合理的のもので本能的なもの神秘的ものではないことを承知している。その目的は推論という方法によって提起されており、感情だけによっているのではない。周知のように推論は観察という科学的方法によって説明される現実の事実によって着想されたものである。われわれはできる限り綿密な方法による分析によってこの問題を謙虚な仕方でも解明しようとする。

社会主義者の行動は私の第一の着目点だが、社会を変革する活動 *action sociale* 社会的活動である。名称は指示し、事実はその裏付けを行う。この見解に最も反対する理論家でさえこの意見には根底で賛成する。経済的唯物論の支持者たちは生産と交換の手段をかえることにより社会全体を変革しようとする。社会主義学派の人々はブルジョワ社会のどの点を崩すべきだという点で一致

12) Marcel Fournier, Marcel Mauss, *Ecrits Politiques* P. 19

13) *ibid.*, P. 22

14) *ibid.*, P. 72. 「社会主義運動」“*Le Mouvement Socialiste*” 15 Oct. 1899 P. 449—462

15) *ibid.*, P. 72

していない。彼らは唯ブルジョワ社会は崩さなければならぬという点において一致している。

それだけではない。社会主義は何程か社会的なのである。彼らは社会集団を形成する。一種の社会を形成するとわたしはいいたい。彼らも信念をもち、共同の利害をもつ。彼らは近代社会の全体の中に新しい集合をつくる。こうして社会主義活動とは一つの社会的活動であり、社会主義政党は社会全体に働きかける一つの社会集団なのである。この言葉でちょっと一休みしよう。社会主義は歴史上新たに生れた前例のない新しい社会的事実である。政党は特別な集団であり、その活動は特種の性格をもつのである。職業集団は一定の社会的機能を目的とする（たとえば労働者や思想家は生産という目的を、他の集団は集団の運営を管理したり、組織することを目的とする）<sup>16)</sup>が、他の政治集団は一の行動に限られた意図しかもたない。そして社会主義は絶対に普遍的である、純然たる機能と社会的行為をもつのである。この点は絶対忘れることが許されない点なのだ。それこそわれわれの行動の特異性、崇高さ、偉大さ、深さをなすものなのである。社会主義は個々の利益の代表者となるだけでなく、社会の能動的部門全体の真の利益の受託者であると主張できるものである。実際社会問題というのはただ専ら経済的な問題だけではない。労働問題、工業問題の解決は今日本質的なものであるが、さらに社会主義が専心すべき他の問題が存在していることを確認しなくてはならない。問題は今ではもっと複雑になっているのである。われわれは労働者問題は、農業問題、法律問題、宗教問題、政治問題が解決されなくとも、解決できると考えていることを認めねばならない。もしわれわれが労働者階級（工場労働者）の問題の解決は労働者の管理職または所有者への接近によってのみ可能と考え、第四階級（*tiers état* ではなく *quart état*）の中に優越的勢力をなさなければ（ブルジョワジーは1789-1815の間に第三階級〔*tiers état*〕を脱しているのだから）、社会主義は今日では破産しているであろうといえる。幸いわれわれはまだそのように目的を狭く考えていない。フランスの社会主義はとくに

市民の数だけの問題を本質的なものとは考えていない。フランス社会主義はその発生期にはその美しい名称が示すようにその中の能動的要素である労働者に限られるが、今日では全社会のあらゆる利益を代表し、管理しようとする。それは今までそうあったように、社会問題全体の解決の主導力として今後も止まるであろう。それは社会現象の全体に対して能動的にはたらきかけることを願っている。またそうできる唯一の主体として働きかける政党であることを自負している。社会主義的行動はたえず常に行動範囲を拡大し、豊かな活動を行っている。今日では社会主義は未来の社会に働きかける唯一の主体である。それは現在社会を解消し、必要な社会を建設しようものなのである。

この命題を証明するため長々と歴史をふりかえる要はない。起源において社会主義はその開祖サン・シモンがのべたところにある。サン・シモンがのべた社会主義体制は1827年の著作にのべられたところに明白なように以上のべた社会的活動の体制なのであり、今日ではその精神は国境をこえてドイツのラサールの労働者綱領にもっともよく継承されている<sup>17)</sup>。しかしそれよりもマルクス主義もその好適な例である。マルクスは科学的な討議からイデオロギー、感情主義、空虚な道徳化説に反駁したのであるし、第二帝政下におけるサン・シモン主義のブルジョワ化にフランスの社会主義が反発したものの、社会主義の歴史的価値は否定されることはなかった。彼らには経済的事実、経済的行動は基本的に重要なものであった。またマルクスも決して他の社会主義理論を排撃したことはなくそれらの説のとく行動を排除したりすることはなかった。マルクスの実践的社会主義、共産党宣言に見られるそれや国際社会主義綱領、パリ・コミューンに際しての宣言、同志との往復文書にみられるに見られるマルクスの社会主義思想は一部の人から非難される左翼の限界をこえたものである。マルクスに反対する人々はどんな権利をもって、マルクスの理論を現代社会における資本の本質や機能についての思弁的批評であると混同しているのか、彼の分析からひき出される実際

16) *ibid.*, P. 73

17) *ibid.*, P. 74

的な結論をマルクス主義もその一部を担う社会主義の実践的体系の全体と混同しているのか。われわれは何故このように聖書（一冊の）にとちこめられるのか、一体どんな権利によって、われわれは狭義で、歪曲され、意図的に縮小されたマルクスに限られるのであろうか。われわれの同志の中からも、マルクス主義の崩壊、マルクス主義の危機の声もあがっている。フランス社会主義の有名な理論家がこの明白なはっきりした運動に対して異常なレッテルをはりつけさえしている。しかし他方社会主義の拡大、ヨーロッパ国民の生活の重要な機構となる程成功してきており、社会主義は起源において当面しなかつた重要な新しい問題に直面し、またそれは新しい領域農民や官庁職員の間にも勢力をのびしている。これらあらゆる領域において言葉の意味を拡大してきているプロレタリアートは一層生産者全体を包含し独自の固有の拠点を確保しようと努めている<sup>18)</sup>。社会主義はそれまで関心を抱いてきた問題に対して狭い教義では対応しきれなくなってきた。そこで、大切なことは原理を明確にし、拡大し、新しい諸問題に適する新しい原理を見出すこととなってきた。つまりむしろ新たな生命、力、魅力が必要となってきた。すべての社会主義の刊行物、文献は経済問題という狭い枠をこえた問題を扱ってきている。社会主義活動は当初から普遍的で広範なものであったが、それは今日も不変である。今や更に新しい波に囲まれ、この波は漸次高くなってくる。従って社会主義の知的領域は拡大し、その活動も拡大する一方である。意識を高めたプロレタリアートはこの歩みについていくことは容易であった。行動は常に理論に先行する。同業組合の労働者会議や社会主義者の会議も従来の労働問題の狭い地盤の上だけに止まることはできなくなり、新しい、広範な問題が登場してくる。フランスでも1879年のマルセイユ会議以降政治問題だけでなく、教育問題にも関心がひろがっている。しかし、それらすべてを詳述する余白はない。問題の中心に立ち戻ろう。

社会主義運動は何の制限も、規定もなしに、社会的活動でありそうでなければならない。そのため何が必要であらうか。次にこの問題に移ってい

こう。社会主義は全社会現象にはたらきかけねばならない。ではこの社会現象とは何か。それは特別の種類のものだが、心理学的な現象である。すなわち、それは意識の現象である。所有権法労働者組織などであるがそれらは社会的事実、社会の現実の構造に対応するものである。だがそれは物的事物ではない。Marxは生産関係を物的事物のように考えたのとモースの考えは完全に異っていることを注意しよう。モースは強調する。それらは社会に結合し社会をいかし、創造する人間の思惑の中においてしか存在しないもので、その意味で心理的事実なのである。経済的事実も同じく、社会的事実であり、心理的事実なのである。

ところで社会主義はこれら社会的事実に働きかけるのであると主張するが、社会主義活動は本来心理的な性質をもっている。それは個々人の精神と全社会集団の中に新しい見方、考え方、行動の仕方を生み出さそうと努めるのである。社会主義活動はそうでないものに社会主義意識をおきかえるのであり、個人と集団の双方に同時に将来社会なものである親しい生命の形態を惹起せしめなければならない。一言でいえば、社会主義活動は現在から未来社会の骨格と大胆な固い組織形態を造りあげるのである。

われわれは現在からこれから叙述するものとなることを証明できる。すなわち、それは現在の社会主義運動の中に経済的特性の明白な二つの行動様式があることを示すことである。それは「労働組合」l'action syndicaleと「生活協同組合活動」である<sup>19)</sup>。モースはこうして労組と生協を社会主義の中核として展開さるべきことを明かにする。この点についてはイギリスのウェブ Webb 夫妻の考え方の影響もあるが、モースは労組と生協を二つを労働者階級が未来の社会へ向って進むときとるべき二つの大きな組織と考えるのだが、その二つを本質的には法律的、社会的組織の現象ではないかと考える。しかしその二つは経済的活動の形態ではあるが、社会主義はそれだけにつくのではない。二つの組織は重要であり、必要ではあるが、それだけで充分なものではなく、真の目的はそこにあるのではなく、真の目的は「社会主義精神」esprit socialisteである<sup>20)</sup>。だから労組員

18) *ibid.*, P. 75

19) *ibid.*, P. 77

20) *ibid.*, P. 80

であり生協員であることだけならば社会主義者でなくてもなりうるのである。社会主義はこの二つの組織の上に立つ原理なのである<sup>21)</sup>。未来の社会主義をつくり出すものはこの社会主義の精神であり、組織はそれに裏づけされなければならないのである。

ただここでモースの組合（労働）についての分析を少し仔細に見ていくことにする。モースは労働組合についてはイギリスのシドニー・ウエップ夫妻の組合に関する歴史と理論を模範と見なし、それが組合を新しい形の社会主義意識の覚醒の現れであり、その労組組織は新しい法律機関であり、それは新しい連帯と犠牲の現れであり、新しい領域を拡大し自からも成長する方法の誕生を意味するものとする。この組合において、社会主義の精神に従うと、組合全員の権利は一人一人の権利と融合し、しかもそれに優越するのである。労組はこのように各人の運命を改善するだけに止まらず、すべての組合員に犠牲を要求し集合体の存在を体感せしめる。そこで組合には新しい行動、思考の形が生じてくる。そしてこの新しい事物も成長していく。組合員全員はその偉大な役割を全員一致して認める。この現実の社会運動についての学者、観察者デュルケームやウエップ夫妻は組合において新しい創造される世界を見ることに一致している。われわれもプロレタリアの意識的活動が組合運動を促進することを期待したいものである。

もう一つの役割は生協運動の担うものである。万人は各人のため、各人は万人のため、*Tous pour chacun, chacun pour tous* というスローガンがあるが、生協のよい例としてベルギーのをあげよう。それは真に社会主義的でその本部は人民による、人民のための真の人民のものとなっている。それは力強い、巨大な利害をもつ組合以上のものである。経済的団体としてあらゆる機構、共済組合金庫、保険金融、退職金庫などをもち、それ以上にベルギーの労働合は無限に豊かな、潜在力の大きな社会主義的生協をもち、経済力に強いだけでなく、比類のない正義と公平の理想力をもち、知的で道徳的な存在となっている。このバリ本部

は（ベルギー人労組の）すべての人に好評で、人民の委員会として活動しこの人民本部は共産主義的管理、博愛と正義の学校といわれ、集合的財産、労働者人民の連帯の仕事の模範として喧伝されている。

組合運動、生協活動は真の労働者開放の事実なのである。それは純然たる労働者運動、闘争のための準備活動であり、経済活動の二つの形態である。しかし、それだけで社会主義を尽くしてしまうのではない。それらは社会主義の不可欠な要素であり、しっかりした後見人である。それらは集産主義の存在、存続のための条件である。それは不可欠の要素であるが、真の原動力ではない。以上にのべたようにそれは社会主義精神なのである。それでは社会主義とは何か。モースはこう問うて、その原理と目的を記憶に保持させる。社会主義は特殊なもので、社会主義の理想目的の合理的形成において成り立つと考えるのである<sup>22)</sup>。それはフルニエのいうように社会的理想主義を重視するのでもないし、タルドのように好妙な理論から弁証法的にひき出してくるものでもない。われわれはここで未来国家のイメージを作ろうとは思わない。社会主義者たることはもっと大きい社会化の方向の中に現今社会の法律形態を変えていき、共産主義的財産をすでに生産において行われているようにしていき、個人のために一部固定した、より大きい社会生活を創造しこの生活を美的で、知的で、道徳的で、物質的であるように変えていくことである。それは社会進化を一層促進しようと欲することである。われわれの表現はたんなる自明の理のようにみえる。それではだめなのだ、そこから重要点が生じてくる。第一に社会主義は一つの信念であり、態度であり、活動である。それは事実を把握し、決意をかためる方法であり、それはいわば一定の角度から社会現象を見るようにさせる精神の理想的志向をいうのである。社会主義の精神とはこの意向を個人の中につくり出し、社会の中に作り出すことで、宣伝はこのことを認めさせるべきである。第二は現在の資本制社会の中からプロレタリアに未来の生活、最も完全な形の共産主義、すなわち連帯性の中に生活させ

21) *idem.*

22) *ibid.*, P. 80

るようにすることである。つまりもっとも合理的、もっとも自覚的にしかももっとも自立的に生活させることである。

われわれは結論ももっとも効果的にのべよう。そうすればわれわれある程度の不安をもって提起している問題に大きな視野をもちうるであろうから。つまり、社会主義活動はどの程度、経済的であり、政治的であり、人道主義的であり、かつ革命的であるべきかである。

政治的活動はもう少し後方にさげられその正しい位置を占めるべきであろう。政治的活動は現在社会、未来社会においてと同様決して第一義的役割はもたされないこと、すなわち一の社会的役割であって、すぐれた社会の代表的機能はもたされないことである。しかしそれだからといってこれを奪うべきではない。社会主義活動で政治的役割が全くないものは異常的であり、無政府主義的である。

「社会主義活動は人道主義的でなければならない。何故なら社会主義は正義と権利と自由から形成されているから社会主義は常に人類 *humanité* の利益の真の管理者だからである。社会主義の中でこれほど重要性の高いものはない。プロレタリアは今日すべての人に正義を還元すべきであり、それこそが昨日の役割なのである。考える全人類の中において18世紀において生じたのと同じ運動がおきなければならない。カントが1789年郵便配達人より先に社会革命の報をとりに行ったような哲学者がなければならない。

社会主義者は最後に何よりも生れながらの革命的な人でなければならない。革命的というのは無政府主義的な意味のものではない。それは社会的、心理的のものでなければならない。革命はすでにわれわれの中にはじまっていなくてはならない。なぜならわれわれはみなブルジョワ社会の時代おくれなことを知っている。それに代って集産主義の到来の必然性を感じている。われわれは心の中でいつの日か事実において二つの社会の間に結びつきがおこると感じている。徐々とした変化ではない。ただ必要なのは急激な変化だけであ

る。それは有機的变化である。われわれのいう革命とはこのことである。

モースの社会主義者の使命論はこうしたものである。それは1899にかかっている。*Sacrifice* をかいたモースとは別人のかいた政治論のようであり、きわめて雄弁である。

そうした使命観にもとづく議論はその後のフランス社会党の第一回会議（1899）においてものべられている<sup>23)</sup>。つづいて1900年の社会主義運動紙にも社会主義の宣伝の効果についてもものべられている。社会主義の動きは他の政党の動きは停滞しているのに比べて一層生き生きしている。新しい使命にもえる政党の動きは政治、経済的目的に向って前進しているともなべている<sup>24)</sup>。南阿のブーア戦争（1899—1902）の際にフランスの *nationalistes* たちの無力なのに対し労働者インターナショナルの組織化によって、鉱山労働者（南阿）を解放し、*fraternité humaine* の実現が可能となったことの報道を行っている<sup>25)</sup>。さらには、モースは1900年、10月15日付の社会主義運動 *Mouvement socialiste* に参加しおり7月に開かれた生協国際委員会でも積極的な発言を行っているのであるが、フランスの社会主義陣営ではジャン・ジョーレスと彼に反対する指導者の間に分裂が大きくなってきた。しかも彼の師デュルケムなどからのモースに対する忠告もあったが、モースに直ちに耳を傾けることがなく、社会主義活動はつづけられた。この間および第一次大戦勃発および戦中の活動はモースの動きに変化はなかった。ただこれらの一々の活動の跡をおうことは余白がないので大部分割愛しなくてはならない。モースの社会主義活動は社会学年報の定期的刊行にも支障をおこしていたのである。ここでモースの社会主義の重要なものとして本稿の中心となる「ボルシェヴィキ運動との関係」に移ることにしたい。

### III

社会主義運動の展開に際してその二つの翼とし

23) *ibid.*, P. 84

24) *ibid.*, P. 86

25) *ibid.*, P. 9



て労働組合運動と生活消費協同組動に力をつくしたモースはヨーロッパ各地を移動してその活発な活動を各方面に拡大していたが、その一つの方向を国際化においていたことは注目されなければならない。第一次大戦中、革命のため連合軍と休戦を結び、ロシアはソ連として登場したが、ソ連は社会主義協議会 *Soviet* の連合体とし再出発した。このソ連邦はだから、労働組合を基礎におくものであるから社会主義の運動にのり出している政治家の関心の中にあっていた。それでモースもそうした点から新しい社会主義の実験を実際に眼にして見ることになったのである。この実見の結果を分析した報告が1924年の *R.M.M.* 誌31巻(1924年)第1号<sup>26)</sup>に発表されたのである。以下この報告の要点を記すことにする。

この論文は *Appréciation sociologique du bolchévisme* と題されているが、I Introduction、II Dans quelle mesure a-t-elle une expérience socialiste、III La Phase terroriste、IV L'échec moral、V L'échec économique、VI La nouvelle phase: La Nouvelle économie、VII Le succès politique, la formation d'un Etat moderne russe、VIII Conclusions の8つにわかれている。

1) まずボルシェヴィズムとはそれに伴う現実主義と経済主義の諸側面とによりたんなる実験ではないことを明かにする。それはロシア革命の上の出来事または一段階である。それはケレンスキー政権(第一段階)の次の段階、つまり第二段階でそれは「共産主義」の段階で第三の段階(新段階)ともいえる。この段階への発展は意図的ではなくケレンスキー政権の失退と戦争および貧困の結果生じたものでそれは最悪の条件において生じた社会的革命といえる。それは社会革命としては破産した社会の後継者であるが、一層悪かつのはこの後継者としての出発がなされた仕方で、軍人と農民の暴動の結末なのである。ところで社会主義政権が実現し、安定するためには社会主義化さるべき事物がまずなければならないのが、それ

がなく、またこの継承が最大の秩序の中に行われるべきだったが、それが何もなかったことである<sup>27)</sup>。そして共産主義の失敗が明かになってからのものである。そして政治指導者間の内部分裂をともない、内部間における暴力に訴える抗争が生じてから以降のことである<sup>28)</sup>。だからこのボルシェヴィズムについての考察はそうした革命の後の混乱した状態についての反省、または総括といったものである。

以下の叙述はだから *Ecrits Politiques* の P. 538から P. 566にわたる部分の要約である。

第一に明らかにしておかねばならぬ点はボルシェヴィズム (*bolchévisme*) は実験などでは毛頭なく、革命中の騒動であり、ケレンスキー政権後の共産主義の「共産主義的」第二段階でありその新たな段階であるということである。しかもこの革命は本意に生じたもので戦争の敗北という最悪の状況において生じたものである。それは破産した社会の継承である。さらに悪いことにそれは軍人と農民の一揆から生じたことである、社会主義が実質的に確固たるものとして成立するためには社会化さるべき事物 *choses* があるべきだが、それが全く欠けていた。また政権の移行後事態が最も秩序正しくなされねばならぬのに、それがなかったのだ。だから、政権(新しい)は大部分のものわかった人々大衆の大部分の人々に意識され、明白な意識によって組織されなければならないのである。最初は押しつけられたものであっても徐々に理解されなければならないのだ、そして社会のためになるのだということがわかる必要がある。実際、労働者や兵士たちの圧政は貴族や将校やブルジョワよりもより以上に社会的でありより反社会的なものだときまったものではないのだ。すなわち、不可側の事件から生じた社会主義社会は悪条件の下に生まれたものでも、それは市民の大部分に望まれたものではないのであった。従って社会革命は真に全国的 *National* なものでなければならなかった。それは外

26) *R.M.M.* は *Revue de métaphysique et de morale* の略で以下この略語を用いる。1924. P. 103-132. 本稿はモースの著の P.P. 337-566による。

27) モースはこのことを *Ecrits Politiques* の P. 514-517でのべた暴力考 *Observations sur la violence* でものべている。( *La vie Socialiste* 10 fév. 1923, P. 2 )

28) *ibid.*, P. 509-531にわたって暴力考に I、II、III、IVとわけてモースは報告している。

債は封鎖してしまい破棄すべきものだということから生れたものではない。それらの債権をも外国に対しては権利を尊重すべきである。ボルシェヴィズムが、一切の外債をふみたおす決定をしたことは公法私法の点から国際法に違反するものである。即刻外国人の所有権の没収は中止すべきである、所有権（債権）の没収は全世界的に同時に行われる社会革命のとき以外は認められるべきことではない。こうした見解はすべてのナショナリズムにも国際主義にも認められるべきである。補償金を払わず外人の権利没収は全人類を相手として拡大されるのでなければ全面的に行われるべきではない。

ロシアの革命の第二期の共産主義、暴力的なものとは本来の社会主義的なものではない。ボルシェヴィズムはある一部の点では社会主義以下に止まり、他の面ではそれを超えているが、全面的に見て後退している。農村ではフランス革命当時の個人主義的革命しかなく、農民が各自勝手を分有するに委せられていた。土地の大部分に対する国有所有権の発動についてはそれは行われておらず、作業もまだまだの段階であり個人の所有権に対して国の所有権は一部実施に移されたが、それも戦時中の軍事的徴用的なものしか認められていなかった。政府のだらだらした矛盾した作業態度の結果、一部不満の農民は耕作を放棄し、却って飢饉をひきおこしたりした。工業においてはソヴィエト政策が社会主義を進めることになった。それで工場は立派な国有となったところで専門の管理者に一委されることになったが、政府はこの期間を短期間にしてしまったので、混乱が起り、大工場は小工場に分解され、そこで旧態依然たる中小企業経営が行われ、技術も近代化しなかった。一部では労働集団の組織化が行われ国立トラストが行われたりしたが、社会主義労組協力ではなく、生産の国有化による官僚的なやり方のばっこが支配的であった。

この個人主義と国家主義はソヴィエト（協議体）の道徳的、物的失敗をひきおこすことになった。ソヴィエトは必要な道徳的運営の方法を知らぬため、専門職業家に暴力を加え、彼らの力を分散し、すぐれた革命的方法を推進させることができず、

生産の実際の当事者が財産の保持者と墮したため、生産の集合的組織化の目的は達成されなかった。それに最悪の欠点は消費生活における共産主義をはびこらせ社会主義を阻止したことである。こうしたことから、社会主義は労働者協議会による経営管理の失敗の試みに対してのみ責任を負わされた。いたる所工場の管理においては明白な個人主義の悪平等主義への退却が目立ち、経済は時代おくれの方式が強くなった。

新時代の運営には消費の共産主義はおろかなことで、実施を規制すべきであった。ところが実際はさらに悪かった。消費の共産主義を実施するため経済自体を構成する基礎になる市場 *marché* を破壊してしまったのである。なぜなら、われわれは市場までの生産（在庫品を含めて）を規制することは考えられるが、市場のない社会は考えられない。市場 *marché* とは市中にある中央市場とは異なるしまた具体的な物をうる場所というのではなく、自由に供給と需要に応じた価格で公開の場で交換が行われる経済的事実をさしているのである。（マルクスの労働価値説に従うのではなく）この市場システムは人類の経済史上徐々に発達し、今日では大部分の生産と消費を規制しているのである。これと異なる市場システムがこれに代り有効にはたらくことは考えられるが、市場の自由は経済生活の基本的絶対不可欠の条件である。結局、現在のところ、予見しうる限り、市場を廃止するのでなく市場の組織化こそは社会主義の生きのびる途を求めることなのである。

所で大部分の社会主義の理論は短期的に将来社会は貨幣が不必要となると予測している。しかし共産主義の実験はそれと反対のことを証明することになろう。モースはこの点では社会主義者のイメージを損うほど、現実の貨幣や市場の存在理由を正しく認めている。だから資本や通貨の流通が今日ほど多くはない国においてさえ、自由市場をなくそうとする試みは失敗しているという<sup>29)</sup>。このことは昨今のオーストラリー、ドイツ、ポーランドの実情が証明している。おくれた国メキシコ、ロシアにおいてもドイツのように高度に発達した国でも金貨またはそれに替る通貨に対する信頼をなくしていない。金またはそれに替る通貨は

29) *ibid.*, P. 542

個人が買物をできる自由の唯一の保障をなしている。そのように考える人たちは合理的であるかという問がある。しかしそれは別問題である。われわれは余り永くかからないうちに純然たる合理的社会が来るとは思わないし、また言語、技術はもちろんのこと法や宗教のような社会現象が非合理的なものを全くなくすであろうとも考えない。しかし、何故需要とか、趣向という経済の領域が純然たる理性の領域なのであろうか。一体、何故かくも価値の異常性の多い世界や、道化などが最も立派な着想の証明書と同様で価値をもつ世界が急にその価値基準を失うことを望むのであろうか。何故この世界が一挙に知性の夢によって整序されたり、呪術や共産主義選良の力に支配される知性によって支配されることを望むのであろうか。

だから、現在目の前の事態から出発し、それにより合理的な形を与えるようにする方がましなのである。すなわち、金をもつ商人の特権を制限し、秩序に従わせ、一部を廃止し、それらを共同体に移行し、それを組織化してその機能を信用の主要な役割遂行者とすることが必要である。ソヴィエットはそれに現在この方向にむかっているようで、それも国有銀行や人民金庫によって支えられているようである。

それ故市場の自由だけでなく、工業、商業の自由もすべての工業経済に不可欠な環境となるべきなのである。だから国家主義と工業のビュロークラシー化権威的指導、生産の法制化、H. スペンサーのいう軍事的経済の支配は今日の人間の交換的本性に対する障害である。今日の交換的人間は唯自分のためにだけ働くのではなく、最善の生産物やサービスと交換するために働くのである。市場と生産（流通を含む）と消費は規制されることができ、西欧では現在行われている。そのための手段は個人的契約であり、トラストや組合である。あるいは生協活動などである。しかし、社会主義社会でさえそれ以上にはできない制限がある。その制限は提供内においてされるサービスや富が討論により決定されるより前に要求されるのであり、その範囲内で消費製品の種類、量、質が公的に決定されることもある。（個人や生協のよ

うな結社によって行われるものである）

そこで社会主義社会は特に経済活動においてある程度の個人主義と自由主義が並んであるいはそれ以上の範囲で行われることをもとにしてのみ建設可能である。そういってもブルドンやマルクスを信ずる人々の中でも誤って消費に対してそれを集合的接収にまで拡大することのある人を除けば意外と感じさせることはない。この例外は党の標語的に用いられることはあるが、慣用的な場合は例外とはされずにいる<sup>30)</sup>。つまり、社会主義経済は一定の前提の下の集合的な接収は認められなくては成立しないのである。公共的接収は必ずしもそれが国家または国家の濫用による所有なのではない。

反対に個人の自由、または個人の自由の増大以外に、工業や商業の自由もあるので、その領域では自由と公共的な統御とは矛盾しないのである。

こうした中間的な集合体を大部分のヨーロッパ社会において尊重し、この制度を発展させることはそれ故に社会主義体制への移行期の賢明で、用心ぶかい本質的作業なのである。おそらくそれを維持することが大切である。とくにデュルケームの假説は（彼が行った）職業集団に道徳的価値を重視したことはボルシェヴィクが行った実験により確認されている。ソヴィエット（協議会）はこの組織の要素的で重要な要素を破壊したことが失敗のもとになっているのである<sup>31)</sup>。

たしかにデュルケームが他の人々よりもはるかに先じて「制度の社会主義」を主張したか否かは明白ではない。しかし、ボルシェヴィクの考え方にもこういう職業集団がもっと強固になり、その今後の発展がこの社会改革の最後をかざるものであることを期待せしめるものであることを保障するものはない。たしかにこの制度をなしですましている可能性は高い。

特に社会化を国家と職業集団のどちらかの一方の形に考えるべきかは明かではない。レーニンとはたしかに生協団体の将来に対して自分の見方は誤りであったとのべている。それは彼が生協に託した希望から見て彼が共産主義の名の下に自由な生協を攻撃させた誤は事実である。同時に彼はす

30) *ibid.*, P. 544

31) *idem.*

べての自由な形を打破し、企業の管理の自由を侵害したことも誤りなのであったことを認めている。

この時期ロシアの新しい経済政策がとろうとした方向は資本主義、国家主義および行政的社会主義の混合物であった。ロシアの共産主義は今や攻勢から守勢へと転じていた。ロシアはそれが創出した中小企業と農民に対してただ闘うだけであった。それは今国家の権利を醸製しようとし、工業の集会的所有権を強化し工業労働者を外国の資本主義に対して抵抗せしめていたが、できない時にはこれと妥協さえした。この仕事は一部では成功を取めた。根底においては社会主義は作られていた近代社会に積みかさなることしかなかった。残ったのは国家、個人生産者の個人的所有権、手工業および農民、国家所有権、集合所有権、半集合的大工業、公共的サービスであった。

結局結論をいうと社会主義の本質はあらゆる形態の所有権を廃止し一のものに帰着せしめることではなく、今までの他の形の所有権に職業団体、地方団体のもの及び国民社会の所有権を加えること、である。もちろん新しい所有権と矛盾する法律は法の体系に従うべきである。だから永久的個人の継承権や土地に対する価値以上の個人権は社会主義と両立できない。それにこれらの条件や(ソヴィエットにより真に廃止されるものは社会主義の仕事の健全性の基礎である。それらが今日まで保持したものは天国に返さるべきである。レヴィ Lévyによると「社会主義は既得権のない資本主義<sup>34)</sup>」なのである。

## II 一般的政策論の結論

社会主義の問題をこえて、ボルシェヴィズムの登場以降新たなあかしをもたらした一般政治に関する問題がある。それは社会科学の設立、合理的道徳や政治的技法の問題について長い間討議された原則の問題であり、社会主義の最新の理論によって動揺させられている問題である。それは力と暴力の使用の問題と法令の力の問題である。

まず暴力の危険性がある。モースはすでに1923年暴力についての神話を論じている<sup>35)</sup>。ここではそれを詳論することは省略するが、モースはボル

シェヴィクはG. Sorelの暴力の神話に追従しているところがある。マルクスにはそうはっきりした考はないが、ソレルの考え方に従ってそれを濫用している。ロシアにいて共産主義者たちは暴力によって権力を掌握してから、暴力使用はそのプログラムの中にはいつているかのように、それはプロレタリアの力、革命の力の特徴のように考えられ、暴力とテロ行為が存する所にのみ共産主義が存在すると見られている。ボルシェヴィクは産婆と幼児とを混同している。彼らは立派な標語の下に自分たちの統括の正当な方法として行為を弁護している。ボルシェヴィクはその暴力と実権を得るための策を謀りエロや警察(秘密)やスパイによって権力を死守している。そして真理にもとづく理論と考え、暴力を新しい社会的共和制の示威であり、起因学的な考察している。党も理論家もそろってこんな大きな誤謬をおかした例は歴史上少い。ボルシェヴィズムがロシア人にもたらしたのは新しい社会ではなく、ロシア国家であった。実際、政府および小数指導者が力と暴力によって国民に彼らの意志を押しつけたのである。このように、通常のやり方としての暴力が国内で成功したが、我々はこの暴力の使用が全く不幸なものであったと考え支持はできないのである。しかもボルシェヴィクの暴力は帝政時代のツアーのそれに匹敵するもので、古い暴力を破壊した以外の善はもたらさず、それ自体はまた新しい悪なのである。そしてそれは新しい社会における生きるものをもつぶしていたのだ。

われわれはボルシェヴィクが政治以外の面で何をもたらしたかを求めたが、無駄であった。ボルシェヴィクの動きがソヴィエトを崩解にいたらしめたのである。たとえ反革命活動に対して暴力が行使されたことは正当としても、ボルシェヴィズムの犯罪はそれを全国民に対して用いたことである。この暴力は肉体労働者、知識階級、都市および農村の農民を命令に従わせるため用いられたという。しかしそのもたらした効果は予期したものとは正反対であった。経済を正常に戻らせ、新しいモデルを示したいとしたが、その到来はおくれた。ボルシェヴィクは党派心によって一部の人に

34) *ibid.*, P. 548

35) *ibid.*, P. 550

より穏健派と見られる人々を迫害し、虐殺し、追放してしまった。そのため却って、自然の補助者となるべき人を失った。社会革命にはいかに黨員は多くとも差支えないのに。また彼らがプロレタリアや農民に与えた訓練はまったく愚かなものであった。だから労働や交換に対する働く意欲の低さ、不正直はいたる所に見られた。命令に従って働くことは（敵の前では別だが）きらわれ。昔の諺に「労働は平和以外の友をもたぬ」というのに、さらに自由もそうなのだ、「奴隷と農奴はよい能率をもたない」<sup>34)</sup>ボルシェヴィクの暴力は国の創造力の源泉、国民の全般的反発を招いていたのである。

国の創造の生産力に対して、共産主義の新しい経済政策はある程度の成功をもたらした。テロリズムの後、ロシアの革命家たちは少しづつ人民がその習俗と法律を作ることを認めた。革命家たちは暴命の第三段階に到達したので暴力は政権防衛のためにのみ用いられなくなり、また政権が生れ成長するのを静かに見とっている。現にわれわれがこの報告を認めている時代にはモスクワの国内政策はまだ諸種の傾向と党派間の動きの間にゆれ動きながら進んでいた。そして次の第四段階に移行し、電圧も低下しているようである。1923年11月の次の全露国会を旨として、第一次ソヴィエトの選挙が行われた。共産党は無党派の存在を認めそれに一定数の代議員を与えた。この方向に進むのであろうか。まもなく人民に言葉を平和に営むことを（ソヴィエトを通じて）委せるにいたるだろう。こうした穏やかな雰囲気の中でまた無限に温和と暴力のない状態において新政策は真のルネッサンスを迎え、ロシアはまさしく、平和と秩序と信頼が再び開花する中で生活をとりもどしていける。

ロシア人民の生活の落ちつきとボルシェヴィキ政権の対立から温和と法律導守主義の道徳が生れ、われわれは暴力は法律と法によって支配される法的秩序によってのみ正当である、それ自体では暴力は拘束によってのみ存在できるのであるといえる。立派な政治においては、法による拘束以外のものは存在しえないし、力は新しい社会秩序は秩序と熱狂においてのみ設立されるのである。社会における個人を結びつける眼にみえない紐帯

は沢山あるし、人々を結ぶ契約、信義と信用は数多くある。この地盤の上において他人を満足させようとする熱意は萌芽し、成長できるのだ。ロシアのこの六年間の生活はそのことを証明しており、テロリズムは人々を結びつけない。「拘束と恐怖は友愛の力弱い紐帯である」<sup>35)</sup>このことをわれわれは史上初の社会主義政権に対してくり返しているというべきである。それらは人間の愛情、愛を創出することはない。故に、このような能動的感情を人々に抱かせることを必要とする社会は相互に献身的であるべき労働者の社会以外にはない。このような型の社会は物的力だけに依存する所には建設されない。

Ⅲ) 政治的呪物崇拜と法律の有効性の少いことの危険、暴力はそれだけで破壊力があるだけでなく、それが法律に伴うとき両者はともに不十分なものとなる。ボルシェヴィクは大部分の場合、正当と考えられる時暴力を用いなかった。しかし、法律が暴力にたよるとすると、それが慣習に支持されている時に比べて力は弱くなる。また法律が十分力をもっているとか十分伝統的なものに支えられる時に比べれば力は弱いのである。

そういうわけで、暴力によるよりは、政治的盲目崇拜もボルシェヴィキの敗北の原因である。ボルシェヴィクの非常に異常な行動は明白にこの政治のモラルの欠如を示してきた。ボルシェヴィズムの決定の中には法律の名前に値しない規則を公布していることが少なくない。われわれは彼らの無力や法的矛盾について条件を附したが、われわれは立法者の資格については条件をつけなかった。6年前からロシアには共産黨員の国家しか存在しないのだ。彼らはその国の正規の政府のように行動してきた。むしろわれわれは彼等が余りにもビザンティン時代からの古い伝統に従ってきたというべきであろう。そしてロシアの独裁者（現）はその直接の後継者であり、彼らの法は君主の作ったものでしかないのである。彼らは6年のうち少なくとも3年はソヴィエトの全露会議で選出された正規の権威に支えられてきたのである。しかしこの法律的に正しくきめられたものさえ、共産党社会を創造するには比較的力はないのである。それらの法律は暴力により守られ、厳しい制限を伴っているからなのである。積極的な表現をもつ

法律も否定的となることが多い。ロシアではそれらは新しい商工業を創り出すより、それらの財産を破壊する方が多いというのはそれらの保護するものは階級闘争の過程で破られたからである。作るよりはつくりだす方が容易であったし、ソ連の法令は働かざる者食うべからずという大原則に従って、旧いブルジョワと新しい関係をもつより少ない方が大切だったからである。この種の法律はむしろ何ら道徳的権威もなしに効果をもっていた。

反対に法律が真に行政管理とか一般管理のように効果をもたらす場合、その力は無力であった。各段階（行政の上下的）または地域の国、地方、都市等の段階により協議会はその機能が異っていたからである。そして教育、技法、医療補助の力は無力であった。行うべき事物の数はかぞえられないし、なすべきことを考えたり、ソヴィエト（協議会）が何をなすべきか考えていることもわからないのである。

この巨大な無力の中に特にロシア的なものがあった。ロシアの社会主義者は組織化し、実現する才はもたなかった。しかし、提出された目的は大部分全体的であり一つ一つ評価されるし、その中相当数は完全に接近可能であると見られるが、人民委員会のメンバーたちが達成できると考えた法律は適用できないか、不適用のものであった。それは一部は委員の能力がないこと、他は悪意にぶつかっている。労働者の支配という言葉ぐらいひびきのよいものはない。しかしそれは労働者の団体がそれを行使することを知っていなければならない。消費の共同体、一種の強制的消費者組合ほど美しく、合理的な言葉はない。しかしそれは管理し、うごかさなければならない。更にその運用に適した人材、誠実な組合員が必要なのだ。各児童に能力に応じて全体的教育を与えるべきだというくらい民主的で正当なことではない。しかし、その教師や人員はどこで見つけるのか、また教育課程はどうきめるのか。子供はどこにいるのか—

共産主義者、単純な社会学者は最高の秩序は法律がこれを神の言葉のように無から作れると信じている。革命の夢にまどわされ、フランスの立憲議会などの例にそれを模倣すればよいと考えて

いる。しかしフランスの場合立憲議会を作った人たちは必要な人材も資金ももっていた。共産黨員はその資金も、道徳も、人間的な作り方ももっていない。そのため、暴力、力、エネルギーと勇敢さはもったにかかわらず失敗した。

もう一度くりかえそう。法律による創造は不可能だ。法律は制裁をなすだけである。国家と法律は拘束はできるが、発想はさせないし、創造を導くことも極めて稀である。大部分の法規定は執行機関の名前を指名するだけであって、行為（規定される）の必然性を確固として命令するわけではない。行為は委員員のメンバーであれ、軍人であれ偉人が行うものである。この行為（実際の）から規則は生じてくる。行為から生じない立派な法律は不毛なのである。それ故に法律がはたらく（実効的に）のはそれが背後に道徳があり、それが制裁を与えるからなのである。法律の改革は習俗とともにでなければ不可能である。そして習俗は技術的手法や美的慣習、立派な労働がともに改善される時にのみ改められる。だから法律は習俗にはおくれるものである。だから国家と法律の万能性を信ずることは止めなければならない。

それで政治的権力の掌握が権力所持の弊害の万能薬ではない。ブルードンやマルクスが権力掌握ということで無意味にしたのは1846年当時では普通選挙にかつことであって、それが最上のものであった1860年以降、社会民主党、労働者階級はこの選挙権を常に勝ち取る幻想に陥り、権力をとれば、労働者の社会共和制の法律をきめうると考えた。ボルシェヴィクもロマン的マルクス主義者もこの誤謬を分有してきた。彼らは余りにも古い理論にとらわれすぎ、政治権力、法律、命令は彼らが公布したものであれば、新しい社会をつくり出せるという考に支配されてきた。それ故にこそボルシェヴィク国家のように強力な国家も、ロシアの道徳的にも精神的に弱い社会しかつくれなかったのである。この事実を哲学者も道徳学者も政治学者も社会学者とともに探求すべきなのである。そして法律は習俗に従うべきで、先行すべきではないし、また経済や技術にも先行すべきではないことを学ばなければならない。

IV 政治を学ぶ者は理論をうち立てるために試みる技法に対して十分警戒すべきなのである。それ

は医薬品の場合以上に狭い範囲を守らなければならないのである。

多くの場合、政治家は知っていることが少ないため、無力なのである。時には原因が明かになっていて、その懸念が正しい時でも、政治家はその無力を知っており、自らそれを感じている。とにかくボルシェヴィクがロシアの崩壊の清算者として登場しながら、この非常な貧窮の中でこの内乱により富を生産できると信じさせたことは一寸した過失だとはいえない。富は労働と平和によってしかもたせないのである。

もう一つの教訓がある。最近10年間において、史的唯物論ほど恐るべき事変によって動揺した理論は少い。それは史的唯物論が他の政治理論と最初からの欠点を共有していたのだ。われわれは社会生活の一定の要因だけに優位を認めた詭弁家の理くつを全く信用すべきではない。どんな社会においても、政治的なことがら、道徳的なことがら、経済的現象も支配的であったことはない。ましてそれに伴う技術論もそうである。それらはすべてまだ少見病的な社会科学で用いられる概念、部類にすぎず、言葉の上の事論にすぎない。各社会は独自の道徳、技術、経済の収斂的行為を供給する唯一の資材にほかならない。政治はギリシアの詩人のいうように、最高の意味の政治はたんにつましだけでなく決してその二人の姉妹道徳と経済と分離することのないものである。

ソクラテスの古い夢である賢明で、節約で、徳のある、法の番人である理想はとくに慎重で、正義を守り、常に人間の行動のモデルであった。そのため責任ある政治家は反世間的態度や唯物論への接近に身をゆだねるべきではなく、実践的真理により近く身を持つことが必要で、空虚な人民革命家や反動家の喝采（拍手）に従うべきではない。当面の所ロシアでもイタリー、ドイツでも明白はクーデター、軍力（政治）、力の濫用が表面的成功を得るかもしれない。しかしそれは一時的動揺、病的な熱狂の徴候でしかない。真の未来は賢明な市民が能力ある代表を選び、各瞬間ごとに人々をコントロールすることのできる国民にある。人民が賢明であれば、彼は何人よりも自分の利益を、思想を知らない人はないのだ。

ただこうした考察は適確でなければならない。

そして間違わないでもらいたいことがある。共産党の経験も一つだけ役立つことがある。それは自分を改革しようとする国民に対して、なすべき仕方、なすべからざる仕方を教えてくれたことをである。それは市場と貨幣を守ることである。国民が学ぶべきは可能な集合的施設を發展させ、自由な結社と集合主義の間に両立不可能な障壁を立てないこと、団結権と個人主義を両立させることである。この社会学的評価は国民に支えらるべき二つの価値をもつのである。科学的にはわれわれの近代的社会についての叙述であり、実践的には社会主義理論を警句や党や階級の力について幻想から洗いよめることなのである。

モースはこうして慎重へのよびかけが行為をゆるめることにあるのではなく、法のために力を用いることは勿論、それを正しく用いることの必要を強調する。何故なら宗教的法と同じく、市民法も強制さるべきではないこと社会的民主主義はその法と人々の利益の名において人々の経済は羊飼いに動かせる、羊の群れのように動かされるものではないこと、社会の人々の行為は暴力にさらされないのと同じく緩慢であってはならないことが大切である。だから慎重さは時には迅速に動き障害をのりこえ抵抗を排除するよう努めるべきなのである。われわれのいわんと欲することは、必要な政治権力はそれだけでは十分ではなく、暴力は法の究極の理性にすぎなくなることである。

最後にこのボルシェヴィズムに対する評価は社会学者の大衆に対する警告で終わることになる。それはわれわれが引出しうる単純な論理と常識の教訓なのである。政治の推理はとくに部族の偶像、市場のイドラにみちており、それらはエトスとパトス（知的、感情的国民性）にみちている。

その上、通常弁護士の弁論のように前提に基づく理論体系であり事実と理性に基づくのではない。従って、討論は法廷での弁論のように不断の詭弁に権利と事実を含むのである。

しかし、ソ連でも英国会やフランスの国会がよく聞く論議には特に禁止されているもの、歴史的、政治的類推によるものが少くない。彼らは前例について論じている。医師も同じようなことをやり、失敗している。しかし医師は他に計算の方法がないので生物学が進歩するまでやむを得ない

面がある。ただ政治には弁解の余地はない。人間から人間へということで論議することは許されていない。われわれに提起されている問題は一つの集合的固体から他のそれ、ロシアの例をフランスへと結論することを要請する。人々は社会は個人ではないという漠たる考方から、少数の前例から一般的に用いられる規定を制定し、他の社会の成員に役立たせようとする。そして誤るのである。ユダヤ人が寺院においてつくる社会やポリネシア人住民の中にはタブーを断念するより死ぬ方を選ぶことがあるが、他には適用できない。彼らの集合体や文明は大ロシア人の古くて、若々しい巨大な同質的大衆とは全く異質的である。彼らにとって可能、不可能なことはわれわれとは異なるのである。ある程度物質的進歩に斉一性があり、心性と思考がある程度統一があり特に国民の相当数が同一年令か平等的な所では、ローマ人やナポレオンが行ったように他の国の制度を移植させることはできる。だから、歴史的的政治的推理の濫用は慎まなければならない。ジャーナリストの非常に広範囲にあたる不正確な博識は幻想を与えやすい。だから各問題についてそれだけが提起され直接その実際の解決ができるように考える習慣は正さなければならない。

通俗的政治的推理も誤をおこし易い。すなわちいわゆる主義(イズム)の誤りである。人びとは資本主義、社会主義、個人主義、平等主義、ナショナリズム、等々をよく口にす。各社会はこれらの原理を適用するしか仕事はなく、それに基づく法律はこれらの観念とシステムを実現するほかに自由はないようである。各党派の詭弁論者は原理を対立させ、言葉をイズムにかえることを喜び(心の)としている。それによる誤りくらい害悪を流すものはない。人はよく、資本主義社会というのが、純然たる社会主義がないと同じくあらゆるものが資本主義だということはない。封建社会、共和制社会といっても同じこと。それは社会はすべていくつかの体制の混合乃至並存型だからである。個人についてあの人は心配性だというとき彼の心臓が他の人と別の機能をもっていることをいうのではないと同様である。正常な場合、各社会はいろ

いろの面をもち、生き、考える諸種の環境を含んでいるのである。それはいろいろの方向に動かされている。あるものは過去からの勢力にうごかされ、他のものは徐々につくられてくる勢力に動かされたり、矛盾する力に動かされている。だから法の専門家の間の連鎖的な論議のようなことはない。それに各理論や教義間の闘いは実際には外見だけで、実際にはその背後に各関係集団の闘争が存在しているのである。だから、それらは合理化を主張する実体が存在しているのである。しかもこうした独断的主張はいつの間にか消去されることが多い。現在存在する政治学派は極端に自らの現実性を主張する。ロシアの新しい経済政策(NEP)も理論のない社会主義から余りかけはなれていない。それが最上なのかも知れない。いづれにせよ哲学者、社会主義者、道徳学者のなすべきことは断定的な方式の責任を他者に委せ、他者に謙虚に、実際に考えさせ、体系や偏見、感情に捉われぬようにすることが必要なのである。モースの結論はこうした謙虚なものである。彼はこうした正義の言葉により政治家はイデオロギーについて感得すべきなのであるという。

#### IV 結論

ボルシェヴィズムの現実の政策についてのモースの見解は以上のものであるが、それは社会主義論としてはマルクスに好意的なようである<sup>36)</sup>あるが、それを承認しようとしたものではなく、社会主義が正義の主張に反するものであることについての批判であることに変わりはない。モースはこの政治論でもう一つ重要な問題も扱っている。それは1924年頃からフランスの対外政策ことに外国貿易政策において不況(世界的)の波が押しよせてきている状況に対して、為替政策を論じていることである。1924年の1月、3月、4月にかけて10回以上にわたり、インフレに対する対策論など重要問題に亘って *Le Populaire* 紙上に論議を展開しているのである。全体として *Ecrits Politiques* の100頁ほどになるのであるが、筆者には為替問題に対して何かをのべる用意がないので、ここで

36) これについては *Darkheimian Studiès (Etudes Durkheimiennes)* vol. 4. にのっている Mike Gane の *Mauss* の *Ecrits Politiques* についての書評でもふれられている。



はその事実だけを記するだけに止める。モースは1920年に彼の本職と見られる民族学、今日の言葉でいう人類学の講座を Collège de France に開設して貰ってから間もない頃である。外に適任者がいないため、モースは Collège de France という最高の地位について間もない時期に外国為替問題について *Le Populaire* 紙上に10回以上に亘って為替問題で論戦を展開した知識の豊かさには頭が下がる思いである。デュルケームのなきあとの *Année Sociologique* の問題もあろう、その時期に為替問題に対して挑戦に応じた気魄と勇気は何人をも驚かせるものであるとあってよい。それに G. Condominas はモースをフランスの民族学の父とよんでいるほど、民族学今日の人類学の領域における業績も多かったし、仕事も多かったのである。これは公認の事実である「モースは何でも知っている」はここにこそ本領を表わしたものであることができる。モースについてさきの Fournier の Marcel Mauss に関する *R.E.S.S.* の1996年の特集号の中で G. Balandier をはじめ Lukes、など十数人が論評しているが、中にはモースの博識に水をかけたような議論があるが、死後30年以上たった現在にいたってこうした遺稿が発見された意味は極めて重要である。改めてモース再論が試みられるべき時期が到来したともいえよう。21世紀への大きな課題ができたというべきであろう。

## 参考文献

- Marcel Mauss, *Sociologie et anthropologie* (1966 2 édit.)
- Marcel Mauss, *Mélange d'histoire des religions, 1909*
- Marcel Mauss, *Essai de la sociologie*, 1974
- Marcel Mauss, *Œuvres* t. I. II et III (1970)
- Marcel Mauss, Introduction in E. Durkheim, *Le socialisme* (1928)
- Pierre Birnbaum, "Préface" in E. Durkheim, *Le socialisme* (1928)
- Marcel Fournier, *Marcel Mauss* (1994)
- Marcel Fournier, Marcel Mauss, *Ecrit Politiques*. (1997)
- Anthony Giddens, (ed), *Durkheim on Politics and State* (1986)
- Lukes, Marcel Mauss. (in *Encyclopédia of Social Sciences* 1970)
- Jean Cazeneuve, *Sociologie de Marcel Mauss* (1969). ただしこのカズヌーヴの著作では最後の遺稿となった“Nation”と「ボルシェヴィズム論」だけで初期中期の社会主義評論などのものは全く取り扱われていない。Cazeneuve も専門は著書 *Sociologie de Rile* など有名な Sorbonne 教授である。
- Revue européenne des sciences sociales (R.E.S.S. と略す)* Tome XXXIV 1996, No 105. 中の論文
- 1 M. Fournier, 'Si je devais réécrire la biographie de Marcel Mauss'
  - 2 S. Lukes, 'Quelques Reflexions sur le Mauss de Fournier,' (p. 39-44)
  - 3 Stedanni MARTELLI, 'Mana ou Sacré?' (p. 51-65)
- G. Condominas, 'Marcel Mauss, Père de l'éthnographie Française' Critique. N° 297. 1972.

## On the Political Sociology of Marcel Mauss.

### ABSTRACT

Recently Marcel Fournier published Marcel Mauss, *Political Writings* in France. It disclosed valuable documents on the meaning of Mauss' idea about socialism. It has been ignored by the colleagues of France. The idea of socialism is not the same as that of Durkheim, his master. But in Mauss' idea we can see the influence of Sidney Webbs. That means the very humanistic ideals of socialism. We insist on this point in the analysis of the idea of socialism developed in his effort to diffuse the labor union and consumers cooperative movement and make a critical assessment of Bolshevik policy in Russia. Mauss' Idea of Socialism insists greatly on the humanistic ideals of his socialism which were greatly influenced by Sidney Webb.

**Key word:** Mauss' idea of socialism, Labor Union and Consumers cooperative, Critique of Bolshevism in Russia.